＜資料＞

COVID-19流行下における成人看護学実習Ⅰプログラム
―学内代替実習の実践報告―

伊藤　加奈子*、熊谷　歌織*、唐津　ふさ*

COVID-19の流行に伴う臨地実習中止に伴い、本学看護学科３年生17名に対し対面による学内代替実習プログラムを検討し実施した。学内実習プログラムは、紙面上の事例を元にして、①擬似カルテ、②模擬患者へのインタビュー、③術後モデル人形を用いた観察と動画視聴、④動画視聴を通した情報収集、⑤術後３日目・６日目の行動計画立案と振り返り、⑥看護過程の展開、⑦退院指導計画の立案・実施・評価、⑧レポート課題を組み合わせた構成とした。事例内容や提示する情報内容の吟味、情報の示し方について、課題が残った。

キーワード：成人看護学実習、COVID-19、学内実習プログラム

Ⅰ．はじめに

2020年、世界的な新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と略す）の流行により、患者との接触を伴う看護における臨地実習が、多くの看護系大学において中止となった。COVID-19に伴う看護学実習への影響に関する調査によると、2020年１月から９月までの開講科目について、250大学から得た1289名の回答者のうち74.1％が臨地実習中止となり、80.1％が学内実習へ変更したと回答している（日本看護系大学協議会．2020）。また、学内実習へ変更した場合においても、64.2％が遠隔実習へ変更しており、対面によるリアルな体験から学びを得る機会の確保が難しい状況にあったことがわかる。本校においても、４月からの４年次前期成人看護学実習ⅡはZoomを用いた遠隔実習により事例展開を行ったが、３年次後期の成人看護学実習Ⅰについては一部施設の受け入れもあり、人数・期間・時間を調整した上で臨地における実習を開始した。しかし、COVID-19の感染拡大により実習期間の後半より臨地実習中止を余儀なくされ、一部学生は遠隔実習や対面による学内代替実習を実施するに至った。

看護学実習は、学生が学修した知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を習得する授業である。多様な場で多様な人を対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携における能力、思考力や問題解決能力、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目的の一部としている（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会．2020）。特に本学３年次の成人看護学実習Ⅰの科目では、看護過程の展開を実践的に学ぶことに加え、看護の対象となる人との相互作用を通して、援助的人間関係形成能力や専門職者としての役割・責務を果たすことを学ぶための重要な機会となっている。例年の３年次の実習では、成人期以降の発達段階にある急性期・回復期・慢性期いずれかの時期にある入院・治療中の患者１名を各学生が担当し、看護過程を展開している。この実習を通して、対象者を生活者として捉え、セルフケア能力を踏まえた個別性のある看護援助に関する理解を深めていく。また、対象者との相互関係を振り返り、援助的人間関係の形成を促進するための関りについても学んでいる。３年次の実習経験を基盤として、４年次には成人看護学実習Ⅱの科目としてチーム医療や多職種連携、看護の調整的役割について学んでいくため、対象理解や看護過程の理解を深めるための重要な実習である。

そこで今回、臨地実習が中止となり対面による学内実習を行うこととなった３年生17名に対し、臨地実習における体験に近づけ看護過程や対象者の理解をより深めることをねらいとして、対面学内代替実習（以下、学内実習と略す）のプログラムを検討・実施したので、ここに報告する。

＊北海道医療大学看護福祉学部看護学科

Ⅱ．本学の成人看護学実習の位置付けと実習目的・目標

１．従来の成人看護学実習Ⅰの実習目的・目標、内容

本学における従来の成人看護学実習Ⅰの位置付け、及び実習目的・目標を、表１に示す。

従来の成人看護学実習Ⅰでは、４週間の実習期間内で１名以上の患者を担当し、オレムのセルフケア不足理論を用いて看護過程を展開する。看護展開の際は、基本情報、病態と治療の関連図、普遍的セルフケア要件７項目・健康逸脱セルフケア要件６項目のアセスメント、全体像の描写と看護目標の設定、看護計画の立案・実施・評価を行う。その他、実習終了後に実施した看護過程や場面を元にレポートを作成し、実践の意味付けを行っている。

２．今回実施した学内実習の目的・目標、内容

１）実習目標と実習期間

学内実習プログラムを検討するにあたり、従来の臨地実習時に設定している対象者との相互作用を通した援助的人間関係形成に関する項目については、実際に患者と関わることができないことから達成が難しいため、目標を一部変更した（表２）。なお、実習期間は10日間と短縮したが、今回とは別の実習期間内に実習目標１の援助的人間関係形成に関連した実習プログラムを実施し、従来３年次に課している実習目標を全て達成できるように設定している。

２）実習内容

⑴　実習プログラムの構成と方法

学内実習プログラムは、紙面上の事例を元にして、①

表１　本学における成人看護学実習Ⅰの実習目的・実習目標・実習方法

Ⅰ．実習目的
成人期にある疾患・病気を抱えた対象者を生活者として捉え、セルフケア能力を促し、自己決定を支える看護援助を看護過程を用いて実践的に学ぶ。
Ⅱ．実習目標
１．看護援助を通して、対象者との間に援助的人間関係を形成できる。
１）対象者に対し、看護者としての関心を持ち日々の援助を実施できる。 ２）看護援助における自己と対象者との相互作用について考察できる。 ３）対象者に対する自分の感情、その場への身の置き方に目を向け吟味できる。 ４）看護援助の実践を通して、看護者-患者関係のあり方について考察できる。
２．成人期にある対象者が、疾患・病気を抱えるということにより受ける影響を全体的に理解できる。
１）生活者である対象者の生活史、人生観、役割、ライフスタイルを全体的に理解できる。 ２）疾患・病気を抱えたことが、対象者の身体・心理・社会面に及ぼす影響を理解できる。 ３）疾患・病気を抱えたことが、現在そして今後、対象者や家族など周囲の人々に及ぼす影響を理解できる。
３．対象者のセルフケア能力を維持・促進するための看護援助を計画できる。
１）対象者のおかれている状況について、セルフケア能力と治療的セルフケアディマンドとの関連でアセスメントし、援助の方向性を導くことができる。 ２）対象者の意向、希望に添いながら目標を共有した上で、看護目標を定めることができる。 ３）看護目標の達成に向けて対象者のセルフケア能力を考慮した個別性のある援助を計画できる。
４．立案した看護計画に基づき援助を実施し、評価できる。
１）計画した援助を実施し、対象者の状況に応じて適宜修正できる。 ２）計画、実施した援助を対象者の反応や目標の達成状況から評価できる。
５．専門職業人としての自己の課題を考えることができる。
１）自己の実習課題を明確にし、具体的目標を設けて課題達成に努めることができる。 ２）基本的看護技術の習得に努めることができる。 ３）自分の考えまたは観察・実施した内容を他者へ的確に伝えることができるよう、文章化・報告・説明する技術を身につけることができる。 ４）看護者としての倫理観を養うことができる。 ・対象者の思いや考えを尊重し、価値観や習慣、信念に十分配慮した看護援助を提供できる。 ・対象者のプライバシーと秘密保持に努めることができる。 ・対象者中心・利用者主体の意味について、実践を通して考えることができる。
Ⅲ．実習方法
３年次後期に、急性期・回復期病院の一般病棟において４週間４単位の実習を行う。

表２　対面学内代替実習における成人看護学実習の実習目的・実習目標・実習方法（変更後）

Ⅰ．実習目的
成人期にある疾患・病気を抱えた対象者を生活者として捉え、セルフケア能力を促し、自己決定を支える看護援助を看護過程を用いて実践的に学ぶ。
Ⅱ．実習目標
１．*事例の患者の概要を捉え、ケアを行うための行動計画を立案するために必要な情報を収集することができる。*
２．*事例の患者がおかれている状況や、背景を踏まえ、必要な援助を計画できる。*
３．成人期にある対象者が、疾患・病気を抱えるということにより受ける影響を全体的に理解できる。
１）生活者である対象者の生活史、人生観、役割、ライフスタイルを全体的に理解できる。 ２）疾患・病気を抱えたことが、対象者の身体・心理・社会面に及ぼす影響を理解できる。 ３）疾患・病気を抱えたことが、現在そして今後、対象者や家族など周囲の人々に及ぼす影響を理解できる。
４．対象者のセルフケア能力を維持・促進するための看護援助を計画できる。
１）対象者のおかれている状況について、セルフケア能力と治療的セルフケアディマンドとの関連でアセスメントし、援助の方向性を導くことができる。 ２）対象者の意向、希望に添いながら目標を共有した上で、看護目標を定めることができる。 ３）看護目標の達成に向けて対象者のセルフケア能力を考慮した個別性のある援助を計画できる。
５．立案した看護計画に基づき援助を実施するプロセスを理解できる。
１）*看護計画との関連性を考え、看護目標の達成に近づくことを目指して日々の援助計画を導くことができる。* ２）*行われた援助の成果を考察し、看護目標の達成度を評価することができる。*
６．専門職業人としての自己の課題を考えることができる。
１）自己の実習課題を明確にし、具体的目標を設けて課題達成に努めることができる。 ２）自分の考えまたは観察・実施した内容を他者へ的確に伝えることができるよう、文章化・報告・説明する技術を身につけることができる。 ３）看護者としての倫理観を養うことができる。 ・対象者の思いや考えを尊重し、価値観や習慣、信念に十分配慮し*関わることができる。* ・対象者のプライバシーと秘密保持に努めることができる。 ・対象者中心・利用者主体の意味について考えることができる。
Ⅲ．実習方法
学内において10日間の実習を行う（他期間に別途プログラムを実施し合計４単位を確保）

＊変更点を斜字で示す

擬似カルテ、②模擬患者へのインタビュー、③術後モデル人形を用いた観察と動画視聴、④動画視聴を通した情報収集、⑤術後３日目・６日目の行動計画立案と振り返り、⑥看護過程の展開、⑦退院指導計画の立案・実施・評価、⑧レポート課題を組み合わせた構成とした。

学生は全員同じ事例を元に、個人ワークとグループワーク、ロールプレイを行いつつ、オレムのセルフケア不足理論を用いて各自看護過程を展開した。看護過程の展開は、病態と治療の関連図、普遍的セルフケア要件２項目・健康逸脱セルフケア要件２項目のアセスメント、全体像の描写と看護目標の設定、看護計画の立案、退院指導の実施・評価を行った。

なお、グループワーク時は、全員が議論に参加できるように３～４名ずつの少人数グループとし、実習期間を通して同グループとすることでグループダイナミクスが働くことを期待した構成とした。

⑵　事例展開

用いた事例は40代の男性で、成人期の特徴として仕事と家庭を持ち社会的な役割を果たしながら生活する人とし、疾患による影響を抱えながら社会復帰を目指す人とした。具体的には、大腸癌StageⅢの診断を受け腹腔鏡下低位前方切除術目的に入院した事例とし、入院から退院までの経過を通して看護過程を展開する課題とした。また、疾患に影響する要因として、術前は既往歴や喫煙歴、術式から術後合併症を予測できるような設定とし、術後は排泄機能障害や性機能障害による影響と生活調整について検討できるような事例設定とした。学生に提示した事例を表３に示す。

⑶　看護過程の展開

まず学生のレディネスを整えることを目的として、実習開始前に疾患名や年齢等の基本的な情報を伝え、疾患・術式・麻酔に関する自己学習を促した。

その上で、実習は以下のスケジュールで行なった。実習１日目（入院時）、実習３日目（術後２日目）、実習４日目（術後５日目）、実習５日目（術後６日目）のタイミングで擬似カルテ・動画視聴・術後モデル人形を用い

表３　事例資料（一部抜粋）

事例の概要	Ａさん　46歳　男性 大腸癌　StageⅢ　腹腔鏡下低位前方切除術＋Ｄ３郭清 既往歴は、高血圧･高脂血症（６年前に診断。内服中）、糖尿病予備軍（今年の健診で指摘を受けた）。 性格は温厚で責任感が強い。医療者に対しては自ら質問でき理解力もある。 肉体派であり、筋肉トレーニングを趣味とするが痛みに弱い。 建築関係の仕事で現場責任者として働いている。 専業主婦の妻と２人の娘と４人暮らしで、家族仲は良く家族との時間を過ごすことを楽しみにしている。 嗜好品は、喫煙歴が26年間（40本／日）、飲酒習慣（ビール500ml／日）。 食事は妻がＡさんの体を考え工夫して作ってくれるが、好物の油ものをコンビニで買って食べる習慣がある。 病気の告知時は、まさか癌とは思わずショックを受けたが、子供や家族のために働くことを励みに治療をし、元の生活に戻れるよう頑張りたいと考えている。
経過	職場の健康診断で便潜血陽性となり、精密検査の結果大腸癌の診断を受け、手術目的で入院となる。 入院時は自覚症状はなく、手術に対する不安はない。予定通り手術を受ける。 腹腔鏡下低位前方切除術＋Ｄ３郭清後、疼痛により離床が進まないが鎮痛薬の調整でコントロールがつき、徐々に行動拡大が進む。 創部出血は見られずドレーン類は抜去され、食事形態も徐々に変更されていく。 術後縫合不全・呼吸器合併症・術後イレウスのリスクがあるが、術後合併症なく経過する。排泄機能障害の兆候があり、退院後の生活において観察や生活調整が必要である。 退院後は仕事に復帰したいという希望があるが、術後の体力低下や排泄機能障害の兆候から、退院に対して不安を表出している。

て情報を提示し、術後３日目と術後６日目の行動計画立案・振り返りを行った。実習２日目には、事例の人物像のイメージ化を図ることを目的に模擬患者への術前インタビューを実施し、全体像の概要的な記述を行った。

また、実習５日目に看護過程課題用動画の視聴と課題提示を行い、実習10日目までの期間を用いて各自で看護過程の展開を行った。その際、看護計画の立案と同時に退院指導計画を立案し、実習９日目に退院指導を実施・評価した。実習スケジュールの詳細について、表４に示す。

⑷　実習プログラム内容の詳細

①擬似カルテからの情報収集

患者プロフィール、術前外来サマリー、手術記録、手術看護記録、経過表、日々の看護記録、検査データ（血液検査・レントゲン・心電図・呼吸機能検査）に関する情報は、擬似カルテとして１冊のファイル内に綴じた。更に、擬似カルテ内の情報は、入院時・術後２日目・術後３日目・術後５日目・術後６日目の計５回のタイミングで追加した。

擬似カルテを用いた情報収集を行ったねらいは二つある。一つ目は、紙面上に既に集められた情報からアセスメントするのではなく、臨地実習と同様に様々な情報源から自ら目的を持って必要な情報を探し出す体験をすることである。臨床では他職種・他部門が示す専門的な情報は複数の情報源に散在しており、それらの情報源から看護師の視点で個々の患者に必要な情報を探し出しアセスメントを行っていく。このアセスメントを行う前段階の情報収集時から行う情報の解釈と探し出す能力についても、養っていく必要があると考えた。二つ目は、患者情報が日々追加されることで患者状況の変化を体験することである。情報の追加により、一時点での状況把握に留まらず、変化する経過に合わせて継続的に個々の患者に必要な情報に着目していくことが必要になる。また、同時に疾患や治療から予測される変化を事前に念頭に置き、変化の兆候を判断しながら情報に着目し続けるなど、状況を予測・判断しながら情報を集める能力は、臨床判断能力の育成にも繋がると考えた。

②模擬患者へのインタビュー

実習２日目に、術前の模擬患者に対しインタビューを実施した。１名の教員が模擬患者役となり、病衣を着用しベッド上でインタビューを行なった。学生は１グループあたり２～３名のグループ編成とし、グループ毎に15分間のインタビューを１回実施した。インタビュー内容は事前にグループワークを行い検討し、インタビュー当日はユニフォームを着用し行った。事例像をあらかじめ設定し、模擬患者が答える内容は学生のインタビュー準備内容に沿って事前に微調整した。また、インタビュー内容の検討と同時並行で看護過程の一環である「病態と

表４　成人看護学実習Ⅰの対面学内代替実習のスケジュール

	事前学習	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
		（入院時）	（術前）	（術後2～3日目）	（術後5～6日目）	（術後6日目）
実習内容と課題	・事例の提示 ・事前学習（個人） 疾患・手術内容・麻酔などの学習準備指示	・擬似カルテの提示① （入院時の術前情報） ・インタビュー準備 ・看護過程 （病態と治療の関連図）	・看護過程 （病態と治療の関連図） ・術前インタビュー実施 ・全体像（概略的把握）	・全体像（概略的把握） ・手術動画視聴 ・術後モデル人形の見学 ・術後2日目の映像教材視聴 ・擬似カルテの提示② （術後～術後2日目の情報追加） ・術後3日目の行動計画①立案	・術後3日目の行動計画①の振返り ・擬似カルテの提示③ （行動計画①後の情報追加） ・術後5日目の映像教材視聴 ・擬似カルテの提示④ （術後4～5日目の情報追加） ・術後6日目の行動計画②立案	・術後6日目の行動計画②の振返り ・擬似カルテの提示⑤ （行動計画②後の情報追加） ・看護過程課題用映像教材視聴 ・看護過程 （アセスメント・全体像）
実習方法		①グループワーク： ・事前学習の共有 ②個人ワーク： ・擬似カルテ①からの情報収集 ・術前インタビュー準備 ③グループワーク： ・病態と治療の関連図記載に必要な事柄の確認 ・術前インタビュー内容の検討	①グループワーク： ・病態と治療の関連図の共有 ②術前インタビュー実施： ・模擬患者へのインタビュー ③グループワーク： ・インタビュー内容の整理 ④個人ワーク： ・概略的な全体像の記述 ・病態と治療の関連図の追加・修正	①グループワーク： ・概略的な全体像の共有 ②術後患者のイメージ化： ・手術動画の視聴 ・術後モデル人形の見学 ③グループワーク： ・術直後の身体状態の確認 ④術後2日目の映像教材視聴： ⑤グループワーク： ・擬似カルテ②からの情報収集 ・術後3日目の行動計画①立案に向けたポイントの確認	①グループワーク： ・術後3日目の行動計画①の共有 ・擬似カルテ③による行動計画①の振り返り ②術後5日目の映像教材視聴： ③グループワーク： ・擬似カルテ④からの情報収集 ・術後6日目の行動計画②立案に向けたポイントの確認	①グループワーク： ・術後6日目の行動計画②の共有 ・擬似カルテ⑤による行動計画②の振り返り ②看護過程課題の提示： ・4項目のセルフケア要件を指定 ③看護過程展開用の映像教材視聴： ④グループワーク： ・看護過程展開のポイントの確認
	6日目	**7日目**	**8日目**	**9日目**	**10日目**	
実習内容と課題	・看護過程 （看護計画立案）	・レポート課題の提示 ・退院指導計画立案 ・看護過程	・退院指導計画立案 ・看護過程	・退院指導実施・評価 ・看護過程	・看護過程・レポートの最終提出	＜レポート課題＞ 「病気を抱え治療を受ける対象者を生活者として捉える必要性」
実習方法	①個別指導： ・セルフケアアセスメント、全体像・看護目標の指導 ②個人ワーク： ・看護過程の修正・追加 ・看護計画の立案	①レポート課題の提示： ②グループワーク： ・退院指導内容・方法の確認 ③個人ワーク： ・退院指導計画の立案（各自） ・看護過程の修正・追加	①グループワーク： ・退院指導計画の共有 ・退院指導計画の立案（2～3名で1つの計画を立案） ②個別指導： ・セルフケアアセスメント、全体像・看護目標、看護計画の指導 ③個人ワーク： ・看護過程の修正・追加	①退院指導の実施： ・2～3名で立てた1つの指導を実施 ②グループワーク： ・退院指導実施の評価 ③個人ワーク： ・看護過程の修正・追加 ・レポート課題の作成	①個人ワーク： ・看護過程の展開の修正・追加 ・レポート作成	

治療の関連図」への取組みを行い、インタビュー内容の検討に繋がることを期待した。

模擬患者へのインタビューを行ったねらいは三つある。一つ目は、インタビューを行うことにより、擬似カルテに含まれていない看護上必要な情報が何かを考え、自ら情報を得る体験をすることである。今回術前にインタビューを行う目的の中には、手術に向けた不安や術後の合併症予防・生活調整に関わる情報、患者の価値観や治療に対する思いなど、術前・術後看護に繋がる情報を得る目的がある。また、看護師は患者と初めて出会った後、日々接する中で徐々に個別的な情報を得ながら患者理解を深め援助していく。実習早期に、インタビューにより生活背景や役割、価値観、病気体験、家族の状況・思いなどの患者の概要を捉えることで、術後の行動計画立案や看護過程展開に繋げられると考えた。二つ目は、自ら意図的に情報を得るためのコミュニケーション能力を養う機会とすることである。内容や聞き方など、インタビュー方法は繰り返し経験を積みながら学んでいくものであり、臨地実習はその体験の場でもある。三つ目は、紙面上の事例情報に現実感を持たせることである。臨地実習と異なり、紙面事例による実習では現実感を得ることが難しい。現実感を持って情報収集することは、看護過程の取り組みや患者への援助を考える際のモチベーションに繋がるのではないかと期待した。

③術後モデル人形を用いた観察と動画視聴

術後の状態に対する理解を深めるために、腹腔鏡下低位前方切除術の動画視聴（秋山他，2020）と共に、術直後の患者の状態についてモデル人形を用いて再現した。モデル人形には、創部痕、経肛門ドレーン・ダグラス窩ドレーン、胃管、膀胱留置カテーテル、硬膜外麻酔チューブ、末梢輸液ルート、酸素マスク、ベッドサイドモニタ（心電図・SpO２・血圧・脈拍・呼吸）を装着し、学生はグループ毎に観察した。観察の際はモデル人形の状況を教員が解説しながら行い、観察後にグループワークで術直後の身体状態について話し合うことで共通理解を得た。

手術動画視聴と術後モデル人形を用いた観察による学習のねらいは、これまで学習してきて得た知識を実際に見ることによって患者状況の理解を深め、知識を応用して援助内容や根拠づけに活かすことを体験するためである。紙面上の事例では、疾患・術式・処置について知識として持ってはいるものの、実際に「見る」体験がないため初学者にとっては特に想像する事には限界がある。実際モデル人形の身体に挿入・装着されているものを見ることで、挿入部位やその意味・患者の体験などに意識を向け、これまでの知識と統合しながら状況の理解・援助の検討に繋がることを期待した。

④動画視聴を通した情報収集

術後２日目、術後５日目、術後６日目の患者情報について、患者・看護師・学生役を用いた動画を作成し、動画の視聴を通して各学生が必要な情報を考え収集する方法を用いた。各動画の視聴後、それぞれ術後３日目・術後６日目の行動計画の立案と、術後の看護過程の展開を行なった。

術後２日目の動画では、医師の診察・創部・ドレーンに関する情報と、術後疼痛により離床が進まず不安を感じている状況の場面を視聴し、ワークシートに視聴の際の気付きを記載した。術後５日目の動画も同様に、医師の診察・創部・ドレーン情報と、患者が術後身体の不安や退院に向けた不安を表出する場面を視聴し、ワークシートの記載を行った。術後６日目の動画では、学生が患者から自宅での生活や思いについて聞いている場面を視聴した。

動画視聴からの情報収集による学習のねらいは、患者の様子や関わりの場面を見る中から、必要な情報に気付き拾い上げてくる体験をすることである。紙面上の文字からは読み取れない患者の表情や姿、雰囲気、声のトーン、大きさなど、その場に居る事でしか得られない情報に触れ、その中から看護上必要な情報に気付き着目する力は、学生の経験・知識によって大きく異なる。看護師は患者と関わる状況の中でアセスメント・援助を決める判断材料として、五感を総動員し情報を得ているが、多くの経験から視点を養っている。視聴した場面のどの情報が看護として着目すべき情報なのかを考えた後にグループ内で共有することで、情報に含まれる意味に気付く機会になると考えた。この看護上必要な情報に気付く力は、アセスメントの前段階として重要であり、これまで学習してきた知識を実践的な知識とするためにも重要であると考える。

⑤術後３日目・術後６日目の行動計画立案と振り返り

④で述べた動画視聴から得た情報を元に、動画の翌日となる術後３日目・術後６日目の行動計画を各自で立案した。術後３日目の行動計画では、術後合併症の早期発見と予防、行動拡大に向けた疼痛コントロールの必要性・観察・援助、術後の食事形態の変化に伴う観察・援助の検討をねらいとした。術後６日目の行動計画では、術後出血･イレウスの観察、排泄機能障害の影響と観察･援助、事例の抱える不安のアセスメント・援助、退院に向けた援助を考える上で必要な情報・具体的支援方法の検討をねらいとした。なお行動計画内容は、事前に上記視点が挙がるようにグループワークで検討し、詳細を各

自で考え、翌日に共有・検討した。また、行動計画の共有後にその後の状況に関する患者情報を追加した擬似カルテを閲覧し、各自が立てた行動計画の振り返りを行った。

行動計画立案による学習のねらいは、今回学内実習目標１・２として挙げている、「患者の概要を捉えケアを行うための行動計画立案に必要な情報を収集する」「患者の状況や背景を踏まえ必要な援助を計画する」ための体験をすることである。学内実習では対象となる患者が不在であるため、設定された紙面事例の情報から看護過程を展開することが主となる。一方、臨地実習では２週目以降に看護計画を立案するため、１週目は看護計画立案よりも前に日々その時々の患者の置かれている状況を踏まえながら必要な援助を考え実施する。臨地実習で求められる、状況に応じた判断と行動の体験をすることがこのプログラムのねらいの一つであり、臨床判断能力の育成に繋がる学びとなるのではないかと考えた。また、行動計画の振り返り・共有を行うことにより、不足していた援助内容や予測的視点に気づくと共に、患者状況の判断に必要となる視点や、自身の考え・思考過程に対する内省の機会に繋がり、視点が広がることを期待した。

⑥看護過程の展開

実習５日目から最終日にかけて、オレムのセルフケア不足理論を用いた看護過程を展開した。今回紙面上の事例であり情報量が限られるため、取り組むセルフケア要件を事例疾患に特徴的と考えた４要件に限定した。病態と治療の関連図を元に治療的セルフケアディマンドを導き出し、普遍的セルフケア要件２項目（水分と食事の摂取・排泄と関連ケア）、健康逸脱セルフケア要件２項目（治療の副作用や悪影響への注意と調整・病気や治療の影響とともに生活することの学習）についてアセスメントし、全体像の描写と看護目標の設定、看護計画の立案を行った。なお、看護過程展開の際、術後６日目の動画視聴により退院後の生活調整の支援に関するアセスメントに必要な情報の収集を行なった。

看護過程の展開は、実習目標４「対象者のセルフケア能力を維持・促進するための看護援助を計画できる」に取り組むためのプログラムであり、従来の臨地実習でも同様の課題を課している。３年次の実習では、これまで学習してきた知識を統合し、成人期にある対象者のセルフケア能力を踏まえた個別性に沿った看護援助を具体的に考える思考過程を学ぶことを大きな目標としており、その達成のために重要なプログラムである。

⑦退院指導計画立案と模擬患者への実施・評価

実習７日目から９日目にかけて、看護過程で立案した看護計画に基づき、退院指導計画を立案・実施・評価した。学生は事前に退院指導計画の内容についてグループワークで検討し、各自で指導計画を立案した。その後２～３名のグループに分かれてグループ毎に改めて指導計画を１つ立案し、模擬患者に対して指導を実施した。退院指導実施時間は15分間とし、学生はユニフォームを着用し、グループ代表者が模擬患者への指導を行なった。指導実施後は10分程度の振り返り時間を設け、実施学生が感想・評価を述べた後、観察した学生・教員それぞれから実施した学生へフィードバックを行なった。その後、実施内容についてグループワークを行い、各自で実施内容の評価を行なった。指導の際、模擬患者は教員とインストラクターが担当し、事前に学生の指導計画内容に沿って事例設定を微調整した。また、学生が一方的な説明を行なった場合には模擬患者役から質問するなど、相互のやり取りとなるように調整した。

退院指導計画の立案・実施・評価は、実習目標５「立案した看護計画に基づき援助を実施し、評価できる」に取り組むためのプログラムとして行なった。紙面上の事例では看護計画の実施・評価ができないという課題があったため、看護計画の一部を実施し評価するプログラムとした。看護援助は、実践を振り返り、実施内容を看護師・患者双方の視点で評価することにより、より個別的な援助に近づけることができる。また、実践を振り返ることは次の自己の行動を変えることに繋がり、看護の質向上のために重要なプロセスである。更に、指導の実施は、患者に対し自分の考えを説明することや、患者の意向・反応を確認しながら実施内容を調整する機会となる。状況を判断しながら実践するという臨床で体験できる大きな学びの機会であり、相互的関わりの中でこそ培われる能力であり重要な機会であると考える。

⑧レポート課題

テーマを「病気を抱え治療を受ける対象者を生活者として捉える必要性」として、学内実習を通した学びについてＡ４用紙２枚程度のレポート課題を課し、実習最終日までに提出とした。レポート作成に向け、退院指導実施後の振り返りのグループワークの際に、患者を生活者として捉える事について話し合えるよう、教員から意図的に問いかけを行なった。

このレポート課題は、実習目標３「成人期にある対象者が、疾患・病気を抱えるということにより受ける影響を全体的に理解できる」に取り組むためのプログラムとして設定した。看護過程の展開だけでは課題の取り組みに集中してしまい、患者を生活者として捉える必要性について意識化するに至らない可能性があると考えた。改めて意識化する機会を設け、患者を生活者として捉える

視点を明確に持つことを期待した。

Ⅲ．考察

臨地実習の中止に伴い学内代替実習を検討するにあたり、３年次の実習目標達成に向け臨地実習により近い体験とするためにどのようなプログラムがより効果的か議論した。学内での事例では多面的な情報が得られにくく、患者との相互関係から得られる内省的な学びも限られるという学内実習の限界を懸念していた。また看護計画立案後の実施・評価についても、実施対象がいないため自ら検討した看護援助を実施することから得られる学びを得ることの難しさを憂慮していた。

そこで、カルテの情報を日々追加することで情報に変化を持たせ、模擬患者への術前インタビューや退院前のインタビュー動画を利用し、学生自身が情報の中から看護に必要な情報を意図的に見つけるためのプログラムを組み入れた。初めは全ての情報を書き留めようとしていた学生は、情報量が増えるとともに必要な情報を探し始め、患者の言葉や紙面からは得られない非言語的な情報をも手がかりとし、アセスメントを展開していた。

また、これまでの講義等で積み重ねてきた学生の中にある知識を結びつけるために、術中動画の視聴や術後モデル人形の観察を行った。そのことにより、手術操作やドレーン挿入など、手術を受けたことによる身体的影響と結びつけ、更に生活や社会活動へも考えを巡らせて必要な観察や援助を考えていくことに繋がっていた。

更に、実践として看護計画を元に退院指導を計画し模擬患者に実施するプログラムも取り入れた。COVID-19の影響により前期授業が全てオンラインとなったため、学生は例年実施していた生身の人を対象とした演習を体験できていない状況にあった。学生自身が看護者として説明することで、患者の反応から実施方法や内容、自らの態度を検証し、評価・修正する機会となっていた。

このような実習上の工夫の結果、学生が実習に取り組む姿勢やクループワークでの反応、看護過程の記録や、退院指導の実施と振り返りの様子などから、学生は実習目標を達成することができたと評価した。

Ⅳ．今後の課題

本実習プログラムの課題として残る内容は、以下にあると考える。

・事例の内容や提示する情報内容の吟味について課題がある。当初臨地実習を行う予定であったが急遽中止となったため、準備期間が取れなかった。短期間での内容検討や資料・課題類作成となったため、内容が十分検討できなかった。
・情報の示し方について課題がある。シナリオを作成して動画撮影を行ったが、動画作成に不慣れなため、音声の問題などの基本的な問題があった。

Ⅴ．終わりに

今回COVID-19の流行により初めて臨地での実習ができない状況を経験し、本来得られるはずの学生の学びをどこまで担保出来るかを考えながら、出来る限り臨床の学びに近い実習形態とすることを目的として実習プログラムを検討・実施した。プログラムの作成を通して、改めて臨地における実習が様々な面で学生を刺激し、多くの学びを得るために重要な場であると考えた。学内振替実習を行った事により、情報を収集し活用する力や臨床判断能力の育成に繋がった部分もあると考えるが、プログラム内容として不十分な部分については今後再度検討・修正する必要性があると考える。また、教材作成の際は使用機材の熟達も必要であり、学生が集中できる効果的な教材を作成することも重要であると考える。

COVID-19の流行は今後しばらく続くことが予測され、臨地実習の期間・内容の縮小化が課題として残る可能性がある。また、COVID-19による影響が無くなったとしても、昨今の在院日数の短縮化に伴う受け持ち患者確保の難しさや臨床指導者の忙しさ、臨床で求められる判断能力を含む実践能力を育む時間確保の難しさなどから、臨地実習を補うために学内での学習機会を設ける必要があると考える。本実習プログラムについて学生からのアンケート結果を分析し、プログラムの評価や学びの内容を明らかにし、今後の実習プログラムについて検討していきたい。

文献

日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会：2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果【調査B】(2020)．2021年１月25日アクセスhttps://www.janpu.or.jp/2020/12/11/17860/.

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会(2020)．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告　看護学実習ガイドライン.

秋山岳，植松大，杉原毅彦，大野浩次郎（2020）．直腸低位前方切除術での直腸吻合：腹腔鏡下，臨床外科，75（２），198-201，2020．2023年２月まで動画公開.

A program for adult nursing practicum under the COVID-19 epidemic：Practical report of alternative practicum in campus

Kanako ITO*, Kaori KUMAGAI*, Fusa KARATSU*

Key Words：adult nursing practicum, COVID-19, program for practicum in campus

* Department of Nursing, School of Nursing and Social Services, Health Sciences University of Hokkaido